



忠臣藏藝談

豊竹山城少掾

文樂座の春興行と致しまして「假名手本忠臣藏」を大序の「かぶと改め」

から、九段目「山科閑居」までの通し狂言で、四月から五月にかけて五十日間の長期興行でござりましたが、お蔭さまで好評を博しました。ところで、私の持ち場は、四月中は六段目「勘平の腹切り」五月替りから四段目「判官の切腹」と、どうも腹切りばかりを受持つた形になりました。御ひいきの方々の中には「なぜ九段目をやらぬか？」といふ御不満もあつたやうで、新聞や雑誌の劇評にも、そのことに觸れて御忠言も頂いてをりますし、私としても、實は今度は一ツ「九段目」を手がけてみたいといふ氣も無いではなかつたのですが、私と九段目といふのは、妙な因縁で、いつもひよんなことから出しそびれてしまふの

です。

まづ最初のつまりきは、いつでしたか、記録を戦災で焼いてしまつたので、ハツキリ年代は覚えておりませんが、三代目越路太夫の時に忠臣藏が出て、もちろん九段目は越路太夫で、私は平右衛門を語らせていただいておました。ところが、越路太夫が病氣で休演されることとなり、その代役を私に勤めさせようといふ話が出たことがあつたそうです。しかし、誰かが苦状を言つたので、それが沙汰やみとなり、九段目は省いて、その代りに「堀川」を出して、私に猿回しを語らせるといふことで落つたのださうです。私も、はじめからその経緯を聞いて知つてゐたら、大いにガン張つて九段目に熱着してゐたかも知れませんが、あとになつて聞かされた話ですからどうにもなりません。

その次に忠臣藏が出たとき、今度とは思つて、その心積りをしてゐますと、合三味線の清六さんが病氣になつたので、この時も九段目はお倉になつて、代りに「良辨杉」を出したようなわけです。それから第三回目には「三度目の正直」といふこともあるからと、大したハリキリ方で、友治郎さんと稽古をはげんでゐますと、今度は私の方が病氣になつて、この度もまたお流れになりました。こういふ風で、九段目といふものは私の身にそはないものだと、妙におちげびてしまつたのです。

それからこれも記録が焼けたので、ちゆうでは年號を覚えておませんが、土佐太夫と津太夫が九段目を半分づつつけて語られたことがあります。九段目は淨瑠璃のうちでも王様で、通し狂言の長帳場でお客さま方も、ようやく退屈氣味になつたところを、グツとしめつけるものだから、半分づつわけたり、つけもののように扱ふべきではないといふ批評をうけられました。全くその通りだと私も思つてをります。

しかし、九段目に限らず、すべて藝事はキツカケが大切で、たとへ自分の力に餘るように思われる大役でも、やる機會に恵まれた時には、がむしやらに飛びついて、しやにむにやり通す氣魄があれば、そのうちには、どうにか物になるのですが、私と九段目のように、ひよんなことで、けつまづくと、演れる機會が來ても、その度に思はぬ故障が出來たりして、演れなくなつてしまふのですから妙なものです。現に今度でも、實は演るつもりで、清六君とも相談してゐたのですが、清六君が病氣をしたのと、この頃は番附の印刷などに日數を食ふので、早手まはしに役割りをきめなければならぬといふやうな關係から、また今回も見逃がすやうなことになつてしまつたのです。しかし、私として決して斷念してゐるわけではありませんから、演れる機會に恵まれたら、お耳をけがしたいと存じてをります。

ところで、忠臣藏といふ狂言は、淨瑠璃でも芝居でも繰返へし繰返へし上演されてゐますから、人形のやり方を芝居に採り入れたり、芝居のやり方を人形に採り入れたりした箇所も少なくありません。一例を申せば四段目の由良之助の駆けつけのところなども、淨瑠璃では、簡単に「バラバラと駆けつたり、やれ由良之助……」といふ風になつてゐますが、芝居の方では「由良之助はまだ來ぬか」「いまだ參上仕りませぬ」を繰り返へして、あの時のいらいらした氣分を強調してゐます。これは人形の方は花道がないために、馳けつけの距離が短かいせいもありますが、この邊は芝居の方がよろしいやうに思はれますし、人形の方も遣ひ榮えがするといふわけで、近頃は芝居風に演るやうになつておます。

また、忠臣藏はこのように、度々上演されました關係で、いつの間にか文句が誤り傳へられて、意味が通じない箇所が出來てゐます。そういふ「穴」を拾ふと、各場面で見つかるやうですが、その一例を申し上げますと、四段目で「こなたのしわざ」といふ文句ですが、大低の本には「しわざ」と濁點をつけて「仕業」と讀ましてゐますが、本來は「しわざ」すなわち「吝さ」つまり「しみつたれ」でないところの場合、十分に意味が通りません。揚足とりの「穴」拾ひでなく、元の正しい言葉に復元するために研究が必要です。

つぎに、通し狂言ですが、興行時間の關係で、始終ころ

した狂言の建て方もできませんでせうが、時々はこうした試みをやつて頂きたいと思つてゐます。忠臣藏のやうにお客さまの方で、すつかり御存知のものは、一場二場を抜萃しても、豫備智識があるから、その前後のつながりを知つて鑑賞して頂くことができますが、物によつては、さうは参らぬものがあります。例へば太閤記など、通しで演ればわかりませんが「太十」の一場面だけ引つこ抜いて演つたんでは、何のことだかわからぬやうなものです。ことに古曲は、筋の運びにおもしろいものがあつて、全篇を演つてこそ、その眞價がわかるといふやうな仕組みのものが多いうです。古曲保存の意味から言つても、時々は通し狂言をやつて頂きたいものです。ことに朱を入れた院本など、今度の戦災で焼けたものが多く、廢曲の已むなきに到つたものも少なくありませんから、いよいよ以つて古曲の保存は必要だと思はれます。一方、新作も大いにやつて行きたいと思ひます。近松でも、書き卸し當時は新作です。もう私のやうな年よりは、感覚もちがひますから、なまぢつか、おかしな色氣を出すのはどうかと思ひますが、若い人たちは、勇敢に飛びかかつて、こなしつてみる氣魄を持つていいと考へてゐます。綱太夫などその點、積極的にやつてゐますが、ただ新作はどうも尻切れとんぼのようで、理屈はつて「考へ落ちの」やうなところがあつて身につきません。そこへ行くと、舊作は出入りがはつきりして、理屈でなく

て、すなほに受け入れられます。忠臣藏がいつまでも倦きられずに、くり返へされてゐるのも、そういふ點に勝れたところがあつたらうと思はれます。新作もそうしたことを考へ合はせて、よい作を出して頂きたいと思ひます。

梅玉を思ふ

諸家はがき回答

木村 莊 八

御手紙の封筒を見た切那、これは故梅玉についてのことではないかと思ひました。梅玉を失つたことは、年とは云へ、劇に關心する程のものにとつて今日「大事件」でした。一舉手一投足、身を以つて、床の絃に乗れる女形の、歌舞伎の最後の存在だつた人を、失つたことになりました。これで舊劇の女形は、この歴史の一節を完全に閉じたこと、なります。我らはこの瞬間を感じする意味で「大事件」です。

梅玉 追悼

高谷 伸

鶯網の相撲は受けて立つと言ひます。梅玉の藝は誰の芝居をも受け邪魔せず立派に自分の舞臺を活かし、終始こせつかなくつたのも子役時代から榎舞臺で通した賜物だと思ひます。昨年「演劇界」の名優評傳に梅玉を擔當した時大變喜んで掲載誌を座右に置き一何ぞ問はれるとお答への代りにこれ見せてゐます」と語つてゐたのも今は憶ひ出となりました。

あでやかな氣品

藤澤 桓 夫

歌舞伎座の花道の戸無瀬の後姿の立派さが今もありありと眼に浮びます。梅玉さんは小生の一番好きな女形でした。あの品のよいあでやかさをもう一度見ることが出来ないと思ふと、全く寂しい氣がします。小春も好きでしたが、どう言ふわけか、數年前に見たこの人の「毛谷村」のお園が一番印象深く眼底に残つてゐます。優艶な「女性」であつたが故に、却つて、男勝りの力持ちの美女の感じが驚くべくリアルに現されてゐたのかも知れません。あのお園にもう一度會ひたい。